

障害幼児に対する両親の養育態度因子と その両親間における類似性

中塚 善次郎*

FACTORS OF PARENTAL ATTITUDES TOWARD REARING THEIR HANDICAPPED CHILD AND SIMILARITIES BETWEEN MOTHERS' AND FATHERS' ATTITUDES

Zenjiro NAKATSUKA

This study examined the coincidences or similarities of attitudes between mother and father in rearing their handicapped child. The Taken Test of Parental Attitudes toward Child-Rearing (included 10 subscales) was carried out on 800 parents: handicapped child's mothers (200) and fathers (200), and normal child's mothers (200) and fathers (200). The data of the four groups were analyzed separately according to the principal factor method, and the canonical correlation analysis between the attitudes of the father and mother was carried out on the handicapped and normal groups respectively. The calculated three canonical correlation values for normal groups were 0.586, 0.518, and 0.490, significantly. The pattern of structure vectors corresponding to each correlation highly coincided with the factor pattern obtained from factor analysis in both cases of mother and father. In contrast, for the handicapped groups, two correlation coefficients were calculated. Their values were 0.622 and 0.464, significantly, and the pattern of structure vectors did not show any coincidence with the factor patterns obtained from the factor analysis.

Key words: parental attitude, handicapped child, factor analysis, canonical correlation.

問 題

親の養育態度と子供の人格形成との関係については、これまで数多くの研究がなされてきたが、これまでの研究をまつまでもなく、親の態度が子供の発達に大きな影響力をもつことは、言うまでもない。そして、この一般原則が、障害児の親子関係についても基本的には該当していることもまた明らかである。

ところで、障害児の親子関係については、障害児をもったことに対する親の心理的負担が大きく(中塚; 1984, 1985)、そのことに対する親の適応過程やそのことのためにひきおこされた不適切な養育態度に研究の焦点が当てられることが多い(伊藤, 1964; Wolfenberger, 1967; 秦,

1971; 田川, 1975)。ここでも、こうした観点にたって、障害児の親子関係について検討を加える。

さて、両親の子供に対する態度を記述・測定しようとする試みは多くなされてきたが(山本, 1976)、日本でもっとも多く使用されている測定検査の1つは、Symonds (1939)の研究に基づいて品川・品川(1958)と品川・品川・森上(1968)によって標準化された田研・両親態度診断検査である。この検査の構想は、基本的には「拒否-受容」、「支配-服従」の2次元で親の態度を捉えようとするものであるが、田研式では、拒否を「1. 消極拒否」と「2. 積極拒否」に、支配を「3. 厳格」と「4. 期待」に、受容を「5. 干渉」と「6. 不安」に、服従を「7. 溺愛」と「8. 盲従」にそれぞれ分割し、またこの2次元とは別に「9. 矛盾」と「10. 不一致」の2尺度を加え、合計10尺度で態度を記述しようとするもの

* 鳴門教育大学 (Naruto University of Education)

である。

それぞれの尺度の内容を品川・森上(1968)より要約すれば、次の通りである。「1. 消極拒否」: 子供に関心が薄い、子供とじっくりいれない、放っておく、他に心を奪われているなどの親が気付かずにとっている態度。

「2. 積極拒否」: 子供をおどかしたり、どなったり、たたいたり、がみがみしかったりというような荒っぽい態度。「3. 厳格」: 親が心にきめている枠組みを子供にはめようとして、行儀作法などをきびしくしつける態度。命令や禁止が多くなる。「4. 期待」: 子供に高い期待や要求をもつため、よその子と比較して競争心をあおり、優れていることを望み、親が達しえなかった望みを子供にかけて早教育をしたり、無理でも有名校に入れようとするといった態度。「5. 干渉」: 子供の世話をやきすぎて、身のまわりの生活習慣を自立させることができなかつたり、子供に自分で考える余裕を与えず親が全部責任をとってしまうといった態度。「6. 不安」: 子供の健康安全について不必要な心配をし、栄養不足、睡眠不足、病気、交通事故などについて過剰な不安をもって子供に接する態度。「7. 溺愛」: 心理的にも肉体的にもびったり結びついて離れられず、ねこかわいがりしたり、甘い甘い砂糖付けにして、子供を温室育ちにする態度。「8. 盲従」: 親が子供の命令に服従して家来のように振舞い、子供をあまやかす。子供の要求を何でも受け入れてごきげんをとり、何でも買ってやる、叱らないといった主従関係を作るような態度。「9. 矛盾」: 親の養育態度が定まらず気まぐれで、昨日と今日の差が激しく、常に動揺する態度。「10. 不一致」: 父親と母親とが反対の方向の態度をとるもので、たとえ親からみれば調和が出ているようにみえても、子供にとっては矛盾しているといった態度。

この検査は、辻岡・山本(1977)も指摘するように、十分な心理測定的な検討資料がいまだに発表されていないが、この検査を用いた因子分析的研究は、森下や(1978)や中塚・田川(1979)、田川・中塚(1980)により行われている。それらによると、おおむね2因子が抽出されており、多少因子の解釈や命名に相違はあるが検査の因子的妥当性は存在すると考えられる。

この田研・両親態度診断検査を用いた障害児の親子関係の研究は、前述の中塚・田川のほかに、小林(1964)のものがある。これらの研究は、いずれも、障害児の親の養育態度には多くの尺度の上で健常児の親に比べて問題が存在することを指摘してはいるが、しかし、それらの研究はその分析が尺度値の検討にとどまっていたり、因子分析を行ってはいないが、問題性の指摘が不十分なま

までである。また、家族ダイナミックスの重要な一側面である父母間の関係については、父母別々に分析するだけでこれまで全く検討されていない。

本論文では、障害児と健常児の両親双方の検査結果を因子分析法と正準相関分析法で分析し、両分析の結果の対応づけによって、障害児の両親間のダイナミックな養育態度にみられる問題性を明らかにすることを主な目的とする。

なお、上記の正準相関分析法は一人の子供をめぐる父母間の養育態度の類似性を分析するわけであるが、こうした種類の分析は、森下(1978)がすでに、健常児の父母について行っている。そこでは、ここで扱うのと同じ田研・両親態度診断検査10尺度2組(父と母)の結果を、20尺度1組のデータとみなして因子分析し、両親に共通な因子を見出そうとしている。その結果、「不一致」尺度のみに共通な因子を見出しているが、この尺度は父母それぞれに対してお互いにしつけの態度に不一致があるかどうかを質問しているのであるから、共通な因子が見出されるのは当然であって、単にデータの信頼性の1つを示すものにすぎない。

こうした方法は、小嶋(1979)が述べる「親子関係の認知の差と対応性」を明らかにするための研究の一特殊性とみなすことができるが、しかしながら、小嶋も指摘するように、こうした方法では父母の両変数群にまたがる共通な因子は、なかなか見出しにくいことが多い。小嶋は前述の論文で、これを避けるためには、父の10尺度と母の10尺度の相関行列を因子分析するインターバッテリー法(Tucker, 1958)を用いることを提唱している。

ここではしかし、前述のように、父母間の共通な因子ないし父母の態度の類似度を見出す方法として正準相関分析法を用いるが、それはこの方法の方が、研究の目的によりかかったものであり、かつ数学的にもより明確であるからであり(芝, 1975; 竹内・柳井, 1972)、したがって後にみるように、今回の目的に対してより有効に情報を取り出すことができると考えるからである。

方 法

1. 分析資料 1) 障害児群 昭和53年から57年にわたって、大阪市内のA療育センターへ教育相談に訪れた障害幼児の父母のうち、両親ともにそろって実施できた200組の田研・両親態度診断検査の結果である。2) 健常児群 和歌山市内B幼稚園児で、父母ともに上記の検査がそろって得られた200組分である。なお、両群の子供の年齢は2歳から6歳までにわたっている。また障害の内容は、発達遅滞が大多数であるが、自閉症、脳性まひ、

ダウン症、情緒障害など、さまざまな障害が含まれている。

2. 分析方法および手順 A. 因子分析

1) 群別および父母別(計4群)の10尺度の平均、標準偏差および尺度間の相関係数を求める。2) それぞれ4群の相関行列を主因子分析する。共通性の推定値として SMC を用いる。3) 因子数を決定して、バリマックス法で軸回転を行う。

B. 正準相関分析 この方法は、2組の変量の組があるとき、各組からの合成変量の相関係数が最大になるようにその合成変量のための一次結合の重みを工夫しようというものである。この方法が応用できるデータの種類については、Campbel & Fisk (1959), Humphreys (1960), Horst (1961) などに述べられているが、実際に応用した例(レビン, 柳井・新田(訳), 1984; 中塚, 1970; 1975)はあまり多くない。ここでは、前述のように障害児群の父母と健常児群の父母の夫婦としての養育態度の類似性の構造を調べるためにこの方法を用いる。

正準相関係数はふつうどちらか変量の少ない方の組の変数の数だけ求められることができるが、正準相関係数の大きさや各正準変量のトレースの割合や冗長性係数(これらについては、レビン, 柳井・新田(訳)1984を参照されたい)などから、有意なものとしていくつの正準変量を取り上げて解釈するかを決定する。

結 果

1. 各尺度の平均と標準偏差はTABLE 1に、各尺度間の相関係数は障害児のをTABLE 2に、健常児のをTABLE 3にそれぞれ示した。相関係数はいずれも上半分が父親、下半分が母親のものである。

TABLE 1の各尺度の平均の差を、父親および母親について、障害児と健常児間でt検定したところ、母親の「厳格」をのぞいてすべての尺度で1%水準以上の有意差があった。つまり、障害児群の父母の方がより養育態度に問題があった。

2. 上記の4つの相関行列の対角線に SMC を入れ、主因子法で因子分析した結果、固有値の大きさの推移は FIG. 1 および FIG. 2 のとおりである。FIG. 1 には障害児の父母のものを、FIG. 2 には健常児の父母のものをそ

TABLE 1 各尺度の平均(M)と標準偏差(SD)

尺度名	父 親				t 検定	母 親				t 検定
	障害児		健常児			障害児		健常児		
	M	SD	M	SD		M	SD	M	SD	
1. 消拒	29.8	3.62	32.7	3.52	**	28.8	4.39	31.3	3.76	**
2. 積拒	29.0	3.65	31.0	3.98	**	27.4	4.21	28.5	3.76	**
3. 厳格	26.8	3.72	28.5	4.26	**	27.3	4.64	27.6	3.89	
4. 期待	29.3	4.37	31.7	4.13	**	30.0	4.85	31.8	3.92	**
5. 干渉	27.4	4.36	32.2	4.23	**	26.2	4.89	30.2	4.47	**
6. 不安	24.7	4.37	27.3	4.08	**	23.9	5.26	25.6	4.49	**
7. 溺愛	23.5	4.46	27.2	4.27	**	23.0	4.67	27.3	4.61	**
8. 盲従	24.4	4.49	27.1	4.49	**	24.4	4.36	26.9	4.12	**
9. 矛盾	26.6	4.63	30.5	4.54	**	26.0	5.04	28.8	4.75	**
10. 不一	27.3	4.55	29.5	4.66	**	28.8	5.03	31.1	4.23	**

**.....p. <0.01

TABLE 2 障害児群の尺度間相関係数(上段父親, 下段母親)

尺度名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1. 消拒		.447	.288	.257	.268	.124	-.041	.159	.559	.372
2. 積拒	.631		.477	.270	.266	.172	-.053	-.010	.573	.348
3. 厳格	.555	.727		.491	.402	.213	.116	.020	.411	.358
4. 期待	.454	.529	.612		.449	.397	.322	.330	.448	.313
5. 干渉	.397	.457	.493	.460		.483	.509	.430	.494	.272
6. 不安	.220	.346	.355	.385	.558		.544	.517	.451	.224
7. 溺愛	-.045	.049	.034	.239	.421	.537		.557	.256	.092
8. 盲従	.202	.161	.060	.261	.429	.463	.581		.427	.232
9. 矛盾	.661	.657	.552	.571	.539	.445	.235	.472		.514
10. 不一	.474	.379	.391	.368	.381	.279	.094	.159	.449	

TABLE 3 健常児群の尺度間相関係数(上段父親, 下段母親)

尺度名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1. 消拒		.627	.401	.396	.348	.196	.008	.174	.581	.495
2. 積拒	.655		.618	.451	.402	.352	.100	.092	.631	.444
3. 厳格	.423	.644		.537	.317	.349	.168	.026	.516	.368
4. 期待	.452	.468	.484		.410	.396	.313	.265	.523	.389
5. 干渉	.403	.479	.423	.463		.570	.492	.527	.568	.382
6. 不安	.101	.226	.313	.345	.445		.515	.360	.458	.298
7. 溺愛	-.057	.139	.228	.251	.437	.583		.600	.200	.154
8. 盲従	.130	.185	.104	.347	.498	.392	.560		.372	.309
9. 矛盾	.555	.593	.506	.534	.647	.351	.259	.400		.571
10. 不一	.473	.444	.372	.332	.350	.179	.155	.338	.528	

れぞれ示した。

3. この結果から4群とも3因子とみなして、2.で求めた主因子解の因子負荷行列をバリマックス回転した結果は、TABLE 4に示す通りである。この表からわかるように父親については障害児、健常児ともかなり明確な単純構造をもつ3因子が得られている。しかし、母親については、障害児と健常児ともに因子構造は単純であるが、因子数は2因子であると考えられる。仮に求めた第

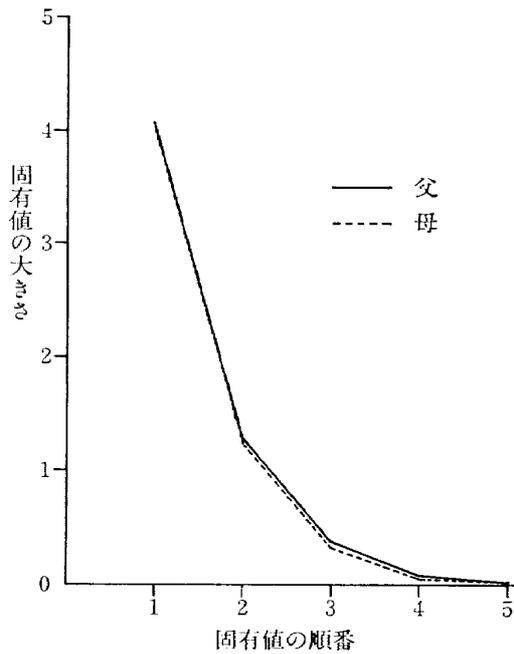


FIG. 1 障害児群の固有値の推移

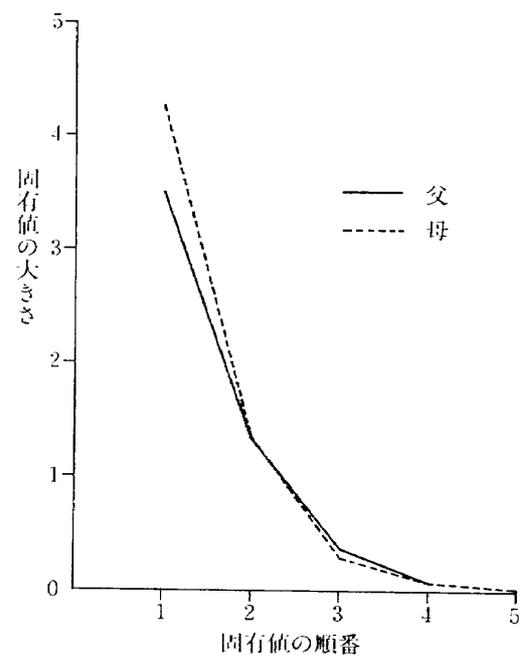


FIG. 2 健常児群の固有値の推移

TABLE 4 4群のバリマックス回転後の因子負荷行列

	障 害 児						健 常 児					
	父 親			母 親			父 親			母 親		
	F1	F2	F3	F1	F2	F3	F1	F2	F3	F1	F2	F3
1. 消 拒	.653	.048	.102	.784	.032	-.174	.724	.032	.207	.781	-.055	.083
2. 積 拒	.623	-.055	.361	.809	.096	.129	.632	-.053	.509	.745	.098	.335
3. 敵 格	.359	.084	.631	.783	.071	.341	.392	.076	.649	.550	.185	.496
4. 期 待	.276	.399	.455	.620	.291	.178	.383	.307	.462	.538	.326	.194
5. 干 渉	.258	.572	.363	.495	.543	.129	.378	.932	.217	.527	.547	.079
6. 不 安	.169	.668	.172	.308	.648	.163	.177	.572	.380	.136	.639	.229
7. 溺 愛	-.089	.751	.128	-.035	.771	.054	-.058	.764	.164	.007	.777	.110
8. 盲 従	.175	.735	-.098	.152	.709	-.241	.225	.731	-.136	.249	.637	-.217
9. 矛 盾	.745	.394	.200	.757	.372	-.178	.709	.318	.316	.735	.354	.066
10. 不 一	.516	.175	.195	.523	.154	-.037	.600	.230	.155	.598	.187	-.061

3因子は、障害児の母親で1変量のみ少し負荷があるが、1つの因子とするには他の値と比較して不十分であると考えられる。

ここで、障害児と健常児の父同志および母同志の間の因子構造の類似性について触れておきたい。まず、父同志についてみると、第1因子は負荷の高い変量が一致していることはもとより、全変量の値そのものも完全に近く一致しているし、第2因子も同様にかなりよく一致している。しかし、第3因子については負荷の高い変量として取り上げられる変量が、健常児の父親では3つ、障害児の父親ではそのうちの2つと、1つだけずれている。

次に、母同志については、前述のとおり第3因子は除外するので、第1因子および第2因子についてみると、

両因子ともきわめてよく一致している。

これらの一致の程度を確かめるために、Harman, H. H. (1967) らが紹介している、因子の一致性係数を次の式で求めた。その結果はTABLE 5に示すとおりである。これらを見れば、障害児と健常児の父同志および母同志は、因子構造がきわめてよく一致していることがわかる。

$$c_{pq} = \frac{\sum_j a_{jp} a_{jq}}{\sqrt{\sum_j a_{jp}^2 \sum_j a_{jq}^2}}$$

TABLE 5 障害児と健常児間の因子の一致係数

	F1	F2	F3
父 同 志	0.993	0.991	0.957
母 同 志	0.985	0.994	0.784

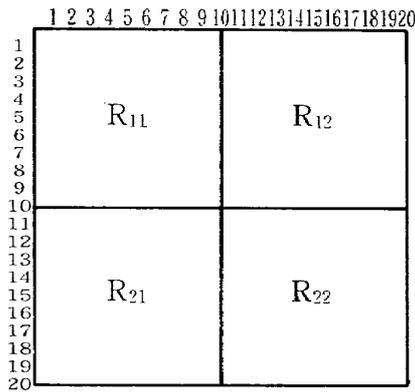


FIG. 3 正準相関分析用の行列

ただし、 R_{11} は父親の、 R_{22} は母親の尺度間相関係数を、 R_{12} は父母間の尺度間相関係数を、 R_{21} は R_{12} の転置を、それぞれあらわしている。

4. 正準相関係数を求めるためには、FIG. 3 のような行列が必要であるが、 R_{11} および R_{22} については、すでにTABLE 2, 3 に示した。ただし対角行列なので半分だけが示してある。

ここでは省略したが FIG. 3 の R_{12} (= R_{21}) の主対角線を抜き出して対照させたのがTABLE 6 である。この値は父母間の同一尺度での相関を示しているが、変量番号1の消極拒否を除いて、健常児の方が値が大体大きい。このことは、健常児の方が夫婦間で態度の一致度が高いことを示している。

TABLE 6 父母間相関行列の対角要素

尺度名	障害児群	健常児群
1. 消 拒	0.303	0.251
2. 積 拒	0.216	0.283
3. 敵 格*	0.124	0.369
4. 期 待	0.322	0.322
5. 干 渉	0.290	0.354
6. 不 安	0.231	0.325
7. 溺 愛	0.201	0.284
8. 盲 従*	0.145	0.402
9. 矛 盾	0.234	0.393
10. 不 一	0.470	0.476

*はその尺度で両群間に5%水準以上の有意差があることを示す。

5. 正準相関分析の結果はTABLE 7 と 8 に示す通りである。

TABLE 7 には、求められた10個の正準相関係数と、構造ベクトル要素の2乗の平均であるトレースの割合および正準相関係数の2乗とトレースの積として求められる冗長性係数を群別に示した。また8には、正準相関係数が3番目までに大きい正準変量の構造ベクトルを示した。

TABLE 7 正準相関係数・トレースの割合および冗長性係数

群	No.	正準相関係数*	トレースの割合		冗長性係数	
			父	母	父	母
障 害 児	1	0.622*	10.5	8.4	0.0405	0.0325
	2	0.464*	12.8	11.3	0.0276	0.0242
	3	0.383	27.1	25.7	0.0398	0.0377
	4	0.264	12.5	13.4	0.0087	0.0094
	5	0.240	5.4	7.4	0.0031	0.0043
	6	0.215	4.9	13.9	0.0023	0.0064
	7	0.198	12.4	7.0	0.0048	0.0027
	8	0.078	4.5	5.0	0.0003	0.0003
	9	0.066	5.1	3.7	0.0002	0.0002
	10	0.037	4.4	3.9	0.0001	0.0001
計		2.568	99.6	99.7	0.1274	0.1178
健 常 児	1	0.586*	23.8	20.2	0.0816	0.0695
	2	0.518*	16.1	16.4	0.0431	0.0440
	3	0.490*	8.1	7.4	0.0195	0.0178
	4	0.349*	13.7	13.6	0.0167	0.0165
	5	0.342*	7.9	10.1	0.0092	0.0118
	6	0.306	6.7	6.4	0.0063	0.0059
	7	0.233	10.3	7.9	0.0056	0.0043
	8	0.112	5.5	8.4	0.0007	0.0011
	9	0.023	3.3	4.5	0.0000	0.0000
	10	0.002	4.8	4.8	0.0000	0.0000
計		2.961	100.2	99.7	0.1826	0.1709

*は χ^2 検定の結果5%水準以上で有意なものを示す。

TABLE 7 の正準相関係数をみれば、全体的に健常児の方が障害児群よりも値が大きい。またこれらの有意性について χ^2 検定した結果、障害児群では2つ、健常児群では5つまでが5%水準以上で有意であった。このことは、父母間の養育態度の類似性が総体的に健常児群で高いことを示している。

トレースの割合を、正準相関係数が有意である2番目までと5番目まで累積してみると障害児群では父23.3%、母19.7%であり、健常児群では父69.6%、母67.7%である。このことは、有意な態度の類似性次元に凝縮された情報量が、それぞれ上記の割合であることを示している。父母間の養育態度の類似性が相対的に健常児群で高いことをより顕著に示すものである。

冗長性係数をみる健常児群では、父母とも正準相関係数が小さくなるにつれて、単調に減少しているが、障害児群では父母とも2か所にこの単調減少傾向のみだれがみられる。このことは、健常児群では父母の態度の類似性が相対的に大きい変量において、お互いの態度変数を説明する割合が大きい、障害児群では必ずしもそうならないことを示している。

TABLE 8 正準相関分析における構造行列

群	正準 変量 尺度	I		II		III	
		父	母	父	母	父	母
障 害 児	1. 消拒	-.091	-.133	.561	.640	.448	.500
	2. 積拒	-.507	-.290	.159	.219	.320	.347
	3. 厳格	-.145	-.113	.089	.052	.408	.607
	4. 期待	.024	-.056	-.128	-.106	.921	.892
	5. 干渉	.187	.094	.638	.526	.414	.427
	6. 不安	-.091	-.050	.221	.221	.504	.570
	7. 溺愛	.114	-.052	.345	.266	.441	.256
	8. 盲従	.065	-.050	.168	.257	.553	.258
	9. 矛盾	-.337	-.305	.464	.312	.604	.473
	10. 不一	-.765	-.782	.318	.315	.325	.414
	正準相関	.622		.464		.383	
健 常 児	1. 消拒	.390	.335	.384	.476	.249	-.001
	2. 積拒	.211	.399	.703	.427	.028	-.114
	3. 厳格	.006	.080	.591	.609	.053	-.139
	4. 期待	.216	.306	.103	.143	.492	.383
	5. 干渉	.588	.564	.089	.128	-.428	-.474
	6. 不安	.562	.422	-.038	-.061	-.223	-.198
	7. 溺愛	.488	.258	-.088	-.160	-.284	-.341
	8. 盲従	.637	.684	-.047	-.080	-.215	-.263
	9. 矛盾	.480	.354	.666	.675	.054	-.204
	10. 不一	.722	.705	.377	.578	.379	.264
	正準相関	.586		.518		.490	

* 障害児群の第Ⅲの正準相関係数は χ^2 検定の結果有意ではないので表には便宜的に示したが、この構造ベクトルについては解釈をさしひかえる。

TABLE 8 の構造行列をみてみよう。この表では行列の要素が、両群とも、父または母のどちらかの値で 0.4% 以上であるものを便宜的に両方ともゴチックで示している。TABLE 4 を対照させてみればわかるように健常児群では、正準変量 1 および II は、それぞれ因子分析の第 II 因子と第 1 因子に対応している。しかし、障害児群では、こうした対応はまったく見られない。第 1 正準変量は「10. 不一致」のみに父母共通して相関が高く、第 II 正準変量は「1. 消極拒否」、「5. 干渉」および「9. 矛盾」で相関が高い。このことは、健常児群では父母間の養育態度の一致が、因子単位で起こっているが、障害児群では、上にあげた尺度でばらばらに起こっていることを示している。これらの結果から有意な正準変量として健常児群では 3 つ、障害児群では 2 つ取り上げて解釈したい。

考 察

1. 田研・両親態度診断検査の 10 個の尺度を、父母別別に障害児群と健常児群間で比較した結果、多くの尺

度で障害児群の方が養育態度に問題をもっていた。このことは、中塚・田川 (1979) の研究とよく一致している。つまり彼等は、125 人の障害児の母と 137 人の健常児の母について、ここで用いたのと同一の検査を用いて、ここと同じ仕方で各尺度の両群間の差を検討しているが、それによると「3. 厳格」を除いて全ての尺度で有意差があり、障害児の母は何らかの面で問題性をより多く持っていることが指摘されている。

2. TABLE 5 でみたように 10 尺度を因子分析した結果、障害児と健常児の父同志および母同志は、第 3 因子を除けば因子構造がきわめてよく一致していた。上でみたような障害児の父母の養育態度には各尺度上で問題が存在したが、これとは対照的に因子構造においてはきわめて高い一致が見出された。このことは、障害児の親は個々の尺度では値が大きく問題があるが、そうした態度を生み出す基本的な心理的次元では健常児と何ら変わりがないことを示していると考えられる。

3. TABLE 4 に示した因子分析結果の解釈に移ろう。

まず、母親の結果であるが、中塚・田川 (1979) は前述のように障害児と健常児の母親について同一の検査でその養育態度について様々の検討を加えている。その中でここで行ったのと同一の方法で因子分析を行い、2 因子を見出している。そこで得られた因子構造は、ここで得られたものとよく一致しており、そこでの解釈がそのままあてはまる。すなわち、第 1 因子は「親中心的態度の因子」であり、第 2 因子は「子供中心的態度の因子」であるとする解釈である。

TABLE 4 からわかるように、ここでも第 1 因子に負荷が高い尺度は、「1. 消極拒否」、「2. 積極拒否」、「3. 厳格」、「4. 期待」、「5. 干渉」、「9. 矛盾」、「10. 不一致」の 7 個である。このうち「5. 干渉」は第 2 因子にも負荷がある。この因子は、子供はこうあってほしいという親の枠組みをはめようとしてはまらないとき、「1. 消極拒否」、「2. 積極拒否」という拒否傾向があらわれたり、また、その態度に一貫性を失い「9. 矛盾」をきたしたり、両親間で態度の「10. 不一致」を起こしたりすることを示していると考えられる。こうした意味でこの因子を親中心的態度と呼ぶことができる。次に、第 2 因子に負荷が高いのは「5. 干渉」、「6. 不安」、「7. 溺愛」、「8. 盲従」の 4 尺度である。この因子は、親が子供を無条件に受容し、尊重して、極端に可愛がり（「7. 溺愛」）、何でも言うことは聞き入れてやり（「8. 盲従」）、子供のこれらのことをいろいろ心配し（「6. 不安」）、子供が自分でできることでもやってあげる（「5. 干渉」）という態度であり、子供中心的態度の因子と呼ぶことがで

きるであろう。

父親の因子の解釈にうつろう。順序は逆になるが、まず第2因子は、母親の第2因子ときわめてよく対応している。したがって、この因子は、母での解釈がそのままあてはまり、父の子供中心的態度であると言える。次に第1因子および第3因子であるが、これは母の第1因子が父では2つに分かれたものと解釈することができる。すなわち、母の第1因子から、障害児では支配の次元をなす「3. 厳格」と「4. 期待」が、また健常児ではそれに加えて「2. 積極拒否」が父親では第3因子へと分化していると考えるのである。したがって、第1因子は「支配」の次元を欠いているが、やはり親中心的態度と考えられる。つまり、子供から離れて、親の内的な心理的態度として子供を拒否し、自己の態度の矛盾や妻との不一致を自己の内部で感じるという態度である。また、第3因子は、前述のとおり障害児では厳格と期待の2尺度よりなり、健常児ではそれに積極拒否が加わった3尺度からなっている。この因子は、障害児の父でみられるように支配の次元をなす下位尺度を含むものであるから、その名称をとって支配の因子と考えることもできるが、ここではこの因子が母では見られなかったこと、第1, 2因子が人を中心に命名されていること、健常児の父では積極拒否も加わっていることなどから、父の厳しさをあらかず、父性の因子と呼ぶことにしたい。これまで、親の子供に対する養育態度の因子分析は数多くなされてきた(村尾, 1966; 小嶋, 1970)。小嶋によれば、これらの研究で一致するのは最初の2次元、愛情と統制であるとしている。こうした観点からみるならば、上記第1因子は父母とも統制の因子、第2因子は同様に愛情の因子であると言える。その点ではこれまでの研究結果と一致しているが、因子の名称は異なっている。親子関係は言うまでもなく親(我)と子(汝)という、基本的には2者間の人間関係であり、その両者双方の自我を尊重しようとする態度の因子、すなわち親の意志、枠組みを通そうとする因子と、子供の気持ちを思んばかろうとする因子との2つが抽出されたことは、きわめて自然なことである。したがって、親子関係という人間関係を理解するための因子の名称としては、ここで採用した親中心的態度、子供中心的態度の方がより妥当なものと考えられる。

4. 父母間における養育態度の類似性について検討してみよう。

TABLE 6 に示した、10尺度における父母間の相関係数は、尺度レベルにおける父母の態度の類似性を表わすものであるが、10尺度中7尺度で障害児の親よりも健常児の親の方が大きい。このことは、全般的には健常児の父

母の方が態度の類似性が高いことを示している。ただ「1. 消極拒否」では、障害児群で高く、「4. 期待」と「10. 不一致」では大体等しくなっている。したがって、これらの尺度では相対的に障害児の親で態度の類似性が高いことを示している。

次にTABLE 7 に示した正準相関係数10個は、10尺度全体としての父母間の類似性を大きいものから順次並べたものであるが、これらの値は、検定の結果障害児では2個が、健常児では5個が5%水準以上で有意であった。またその累積トレースも当然健常児群で高かった。これらのこともまた上記と同様に健常児の父母の方が態度の類似性が大きいことを示すものである。

5. 以上の考察で障害児の父母よりも健常児の父母の方がお互いの養育態度の類似性が高いことが明らかにされたが、ではなぜそうした差異が生じるのか、構造ベクトルの吟味を通じて検討する。

構造ベクトルは、各変量集団から合成された正準変量と合成に使われたものの変量との関連の深さを表わしている。

まず健常児父母の構造ベクトルについてみよう。正準変量Ⅰの構造ベクトルは、「5. 干渉」から「10. 不一致」までの6個の尺度で値が大きい。「9. 矛盾」と「10. 不一致」は第Ⅱ正準変量とも相関が高いので除いてみれば、「結果」で述べたように、正準変量Ⅰは父母ともにTABLE 4 に示した因子分析の第Ⅱ因子とよく対応している。また、正準変量Ⅱの構造ベクトルは、「1. 消極拒否」、「2. 積極拒否」、「3. 厳格」、「9. 矛盾」、「10. 不一致」の5個の尺度で値が大きい。TABLE 4 の因子分析の第Ⅰ因子は父母で多少相違があるが、正準変量Ⅱはこの第Ⅰ因子に対応したものと考えられる。第Ⅲ正準変量は、「4. 期待」と「5. 干渉」で父母ともに値が大きい。これまでの記述から当然第3因子との対応が考えられるが、必ずしも明確ではない。

このように正準変量のⅠとⅡが因子のⅡとⅠに対応していたことは、健常児の両親の養育態度の類似性が因子を単位として起こっていることを示している。つまり、父親(あるいは母親)が「子供中心的態度」をとっていれば、母親(あるいは父親)もその態度をとり、父親が「親中心的態度」をとっていれば、母親も同じ態度をとっていることを表わしている。父母どちらが主導権をもつかは不明であるが、夫婦間に子供の養育をめぐって共通な理解や態度が成立していることは明らかである。

次に、障害児父母の構造ベクトルの考察にうつる。正準変量Ⅰで父母ともにその値が大きい尺度は「10. 不一致」の1尺度のみである。すでにみたように健常児では

この尺度は、正準変量ⅠとⅡに相関があり、この尺度のみが孤立して特定の正準変量に相関をもつことはなかった。また、この正準変量Ⅰの正準相関係数は0.622であり健常児群の0.586よりも大きい。しかも正準変量Ⅰの冗長性係数（一方の変量群から得られた正準変量によって説明される他の変量群の分散の割合）をみれば健常児では父0.0695、母0.0440であるが、障害児では父0.0405、母0.0325とこれより低い。ここに障害児の父母のきわだった特徴があると言える。すなわち、障害児の父母の基本的な一致は「10. 不一致」のみで起こっている、と言える。つまり、TABLE 6 に示した父母間の各尺度の相関は尺度ごとの一致の程度を示しているが、障害児群では相対的に値が大きいのは、「1. 消極拒否」、「4. 期待」、および「10. 不一致」の3尺度であった。しかし、全尺度での一致の次元を見出そうとするときには「不一致」尺度のみがきわだった大きさを示すことになるのである。

障害児群の第Ⅱ正準変量の構造ベクトルが父母共に大きい値をもつのは「1. 消極拒否」、「5. 干渉」、および「9. 矛盾」であったが、このことは「不一致」以外で障害児の父母がともに一致する態度は先の因子分析でみたように、「親中心的態度」に属する「1. 消極拒否」とどちらかと言えば「子供中心的態度」に属する「5. 干渉」という「9. 矛盾」的な態度においてであるということを示すものである。

ここでこのことの臨床的な意味について考えてみよう。「1. 消極拒否」という態度は子供に心が通じていない親子の心理的断絶状態を示すものであり、「5. 干渉」は子供の行動に何かとうるさく口出しをするという態度である。この両尺度が危険地帯である親にみられるのは、子供のわるい面ばかりが目につく、普通なら見過ごしたり、黙認できたりする行動までもが、やたらにかんにさわって何から何までいちいち口に出して注意し、子供の自我の存在の余地がないほどやりこめてしまうという態度であり、臨床上もっとも好ましくない態度の1つである。夫婦間の不一致が基本的に健常児より高い上に、こうした好ましくない態度でしか、夫婦間の一致が起こっていないことは、障害児の親の養育態度における問題性をより大きくしていると言えるのである。これまでに、何人かの研究者によっても、障害児をもつ夫婦間には不和が生じやすいこと (Hutt, M.L. & Gibby, R.G. 1958)、障害児を受容する過程の1つに「努力や苦悩を支える夫婦、家族の協力」が存在すること (鱈, 1963)、しかし、不幸にも両親間の建設的な相互間の支持は、めったに見られず、かわりにお互いの対立がますます激化すると感じる

ようになること (Michaels & Schucman, 1962) など、両親間のダイナミクスについての指摘がなされているが、しかし、対立や一致が起こる構造については不明のままであった。ここで得られた上記の知見は、障害児をもつ夫婦間のダイナミクスについて新たな視点を提供するものと考えられる。

引用文献

- Cambell, D.L. and Fisk, D.W. 1959 Convergent and discriminant validation by the multitrait-multimethod matrix. *Psychological Bulletin*, **56**, 81—105.
- Harman, H.H. 1967 *Modern factor analysis*. (2nd Ed) Chicago and London: The University of Chicago Press.
- 秦 安雄 1971 心身障害児の親子関係 大西 誠一郎 (編著) 親子関係の心理 金子書房 190—207.
- Horst 1961 Generalized and canonical correlations and their applications to experimental data. *Journal of Clinical Psychology Monograph Supplement*. No. 14, 331—347.
- Humphreys, L.G. 1960 Note on the multitrait-multimethod matrix. *Psychological Bulletin*, **57**, 86—88.
- Hutt, M.L. and Gibby, R.G. 1958 *The mentally retarded child*. Boston: Allyn and Bacon.
- 伊藤隆二 1964 精神薄弱児の心理学 日本文化科学社
- 小林久利 1964 精神薄弱児の親子関係について 精神薄弱児研究, **74**, 22—27.
- 小嶋秀夫 1970 講座親子関係の理解(一), (二) 児童心理 **24**, 1644—1661, 1812—1829.
- 小嶋秀夫 1979 講座親子関係の理解(一), (二) 児童心理 **33**, 938—955, 1126—1143.
- レビン 柳井晴夫・新田裕史(訳) 1984 多変量相関分析の方法 新倉書店 (Levine, M.S. *Canonical analysis and factor comparison*. Beverly Hills: SAGE Publications.)
- Michaels, J. and Schuman, H. 1962 Observations on the psychodynamics of parents of retarded children. *American Journal of Mental Deficiency*, **66**, 568—573.
- 森下正康 1978 親の養育態度と子どものパーソナリティの発達に関する因子分析的研究 和歌山大学教育学部紀要 教育科学, **27**, 53—72.
- 村尾能成 1966 親の養育態度と子どもの性格 遠藤汪

- 吉・前田嘉明編 心理学への招待 六月社 219—260.
- 中塚善次郎 1970 高校学業成績の規定要因に関する研究 教育心理学研究, 18, 1—13.
- 中塚善次郎 1975 内田クレペリン検査の数量的処理による高校学業成績予測力改善の試み 大野晋一編 大阪市立大学心理学教室25年のあゆみ 大西憲明教授退任記念事業会 203—223.
- 中塚善次郎 1984 障害児をもつ母親のストレスの構造 和歌山大学教育学部紀要教育科学, 33, 27—40.
- 中塚善次郎 1985 障害児をもつ母親のストレスの構造 (Ⅱ) 和歌山大学教育学部紀要教育科学, 34, 5—10.
- 中塚善次郎・田川元康 1979 障害幼児の親子関係(1) 日本特殊教育学会第17回大会発表論文集, 48—49.
- 芝 祐順 1975 行動科学における相関分析法 第2版 東京大学出版会
- 品川不二郎・品川孝子 1958 田研式親子関係診断テスト手引 日本文化科学社
- 品川不二郎・品川孝子・森上史郎 1968 田研・両親態度診断検査 明治図書
- Symonds, P.M. 1939 The Psychology of parent-child relationships. New York: Appleton-Century.
- 田川元康 1975 精神薄弱児の親の心理とその変容 大野晋一編 大阪市立大学心理学教室25年のあゆみ 大西憲明教授退任記念事業会 69—88.
- 田川元康・中塚善次郎 1980 障害幼児の親子関係(2) 日本特殊教育学会第18回大会発表論文集, 274—275.
- 竹内 啓・柳井晴夫 1972 多変量解析の基礎 東洋経済新報社
- 鎌 幹八郎 1963 精神薄弱児の親の子供受容に関する分析的研究 京都大学教育学部紀要, IX, 145—172.
- 辻岡美延・山本吉広 1977 親子関係の相互認知 一小嶋氏の原資料の分析— 教育心理学研究, 25, 8—29.
- Turcker, L.R. 1958 An inter-battery method of factor analysis. *Psychometrika*, 23; 111—136.
- 山本吉広 1976 子供理解のための親子関係の類型化 青少年問題研究, 25, 35—47.
- Wolfensberger, W. 1967 Counseling the parents of the retarded. In Baumeister, A.A. (Ed.), *Mental retardation*, Chicago: Aldine Publishing Company. 329—400.

付 記

本論文は、和歌山大学教育学部田川元康教授と連名で日本特殊教育学会第20回大会で発表した筆者担当部分を中心に、まとめ直したものである。

(1988年1月6日受稿)